

観光まちづくりにおける地域住民の主体性の所在

—滋賀県高島市新旭町針江集落を事例に—

韓 準 祐*

1. はじめに

日本の村落共同体は、近代化が進められるなか、前近代的なもの、ゆえに排除されるべきものから、急激に進んだ都市化と工業化による人間性の喪失という課題を解決してくれる、すばらしき「しきたり」、「文化」を有する母体として評価されている¹⁾。1990年代から日本政府の莫大な資金及び政策の後押しを受け普及していったグリーンツーリズムは、人間性の回復が必要とされる都市民の憩いの場、安息の場を田舎が提供するという図式で成立する²⁾。

一方、1970年代から「地域主義」、「地方の時代」、「文化の時代」という標語とともに進められてきた、農山村における地域住民が主体的に行ってきたまちづくり活動も注目されている。とりわけ、この時期から観光を視野に入れたまちづくりの実践に積極的に取り組んだ地域も多数存在するが、皮肉なことに近年観光まちづくりの成功事例として高い評価を受けているほとんどの地域は、当時、開発に出遅れた社会的背景を共有している³⁾。

「村おこし」、「地域おこし」という表現は、開発に出遅れた地域を「おこす」活動を意味しており、開発が進んでいなかった地域においては住民主導のまちづくりが積極的に展開される余地があったともいえる。

観光研究において主要なトピックの一つになっている観光まちづくり研究は、主に2000年代に入って蓄積された。とりわけ、観光庁が発足した2008年以降、実践的な手法に焦点を当てた研究が急増した⁴⁾。例えば、敷田ら⁵⁾や十代田⁶⁾、さらに大社⁷⁾は、他地域への応用可能性を視野に入れながら、観光まちづくり実践における観光の経済的効果や産業としての持続性に関する考察の必要性とともに、ブランディングとマーケティングの重要性を説いている。しかし、彼らの研究に地域内部における多様な主体間で生じる軋轢や葛藤を捉える分析視角は示されていない。

一方で、上記のような実践的な手法への焦点化に関する批判的考察も行われた。とりわけ、政策論的視点からの批判⁸⁾、地域イメージの表象における困難に関する指摘⁹⁾、権力関係に関する焦点の不在を指摘し社会学や人

* 多摩大学グローバルスタディーズ学部

キーワード：観光まちづくり、主体性、針江生水の郷委員会

Key words：Tourism-based Community Development, Subjectivity, The Committee of Harie Syozu Village

類学分野での議論から観光まちづくり研究に必要とされる理論的枠組みの提示¹⁰⁾等が続いた。しかし、最も顕著な動きとしては、成功事例として捉えられている地域で見られる軌轢や葛藤に焦点を当てる研究であろう¹¹⁾。野田¹²⁾は、観光まちづくりに取り組む滋賀県高島市新旭町針江集落の事例を取り上げ、同地域が観光地の画一化に陥ることのない理由を、ゲストではなく、ホストに向けた実践にあると分析する。また彼は、コミュニティビジネスとして針江生水の郷委員会（以下、生水の郷委員会）の活動を捉えながら、彼らの活動が地域内に認められるようになったのは、経済的還元ではなく、地域の管理秩序を乱さない非経済的還元の結果であると述べる¹³⁾。地域内の多様な主体の声と実践を拾いあげ考察した野田の論考は、観光まちづくり論において重要な示唆を与えるものである一方、地域内部のみへの焦点化により、地域外部への視点が捨象されるという課題も見受けられる。大分県由布院を事例に観光まちづくり論の再考察を試みた韓の論考¹⁴⁾においても、地域内における多様な主体間で生じる葛藤や軌轢に注目するあまり、外部への視点が欠如している。野田や韓のような観光まちづくりにおける葛藤に焦点を当てる論考以外にも、実践的手法と応用可能性を注目する観光まちづくり研究に対する批判的考察においては、しばしば地域外部への分析視角を提示しない論考が見られる。

実践的手法への焦点化とそれに対する批判的考察という観光まちづくり研究の二極化の傾向が強まるなか、外部から期待される地域像を認識し、それに応えようとしながら、同時に地域内の多様な主体間で生じる軌轢や葛藤の緩和にも取り組む人々の姿を捉える試み

は管見の限り見られない。本稿では、滋賀県高島市新旭町針江集落の生水の郷委員会と彼らの実践に焦点を当て、地域住民の主体性を軸に観光まちづくり研究の再考察の可能性を探りたい。

II. 地域社会に求められる主体性とその限界

観光まちづくりに関連する56編の文献をレビューした森重¹⁵⁾は、観光まちづくりの定義及び捉え方に、地域社会が主体になる、地域資源を活用する、交流を促進する、まちの魅力を高めるという4つの項目が多く見られることを指摘する。「地域社会が主体になる」という項目は、曖昧な地域社会の概念に加え、主体性に関しても観光まちづくり研究において十分に議論されていない。中央と地方、都市と田舎の図式を含む、不平等で非対称なマクロな構造にある地方社会において主体性は限られたものになるが¹⁶⁾、地域住民の主体性が発揮される事例もある¹⁷⁾。

琵琶湖湖西のマキノ町知内の浜開発においては、1963年に知内地区の協議員会で観光委員会が設立され、外部の資本に頼らず、村が主体的に開発に携わる路線が選択され、翌年には、浜開きし、村の役員が管理運営することになった。その後、リゾート開発の波が押し寄せるなか、1988年に滋賀県の策定した「琵琶湖リゾートネックレス構想」にマキノ町一体が重点整備地区に選ばれたこともあり、知内浜の再開発の計画「マキノ浜地域開発ビジョン」が策定された。1990年から93年にかけて「マキノ浜観光開発整備事業」として総事業費約7億1400万円の予算が組まれ、1991年と1992年にそれぞれマキノ・サ

ニービーチ高木浜オートキャンプ場、マキノ・サニービーチ知内浜オートキャンプ場が開設された。経営規模の拡大に伴う課題を解決するために管理運営体は法人化した。地区の協議会が実質的な執行部となり、重要事項の決定権を握る一方、支配人や事務員は近隣の者が選ばれ、地元のイニシアティブが保持された。

同様に知内の浜開発の事例を扱った松田¹⁸⁾は、観光とのかかわり方を探る地元住民の様子を「事業の論理」と「管理の論理」に基づいて分析している。松田のいう「事業の論理」とは、投資して一定期間の間は赤字を覚悟しても、最終的には利潤追求を第一に考える理論で、「拡大再生産の論理」とも言い換えられる。一方、「管理の論理」において、利益は追い求めるのではなく、自然に入ってくるものとして捉えられ、単純再生産が反復される。松田によると、地域住民の主体性を保ちながら、村主導で行った知内の浜開発は、「事業の論理」から見れば失敗例だが、「管理の論理」からは反対に成功例になると述べる。井戸と松田は、外部から押し寄せる開発の波に対し、地域住民が主体性を保持しながら観光にかかわる様子を描いたが、その実践が決して容易ではないことも確認できる。

一方、寺岡¹⁹⁾は、奈良県吉野郡の自治体によるCI戦略²⁰⁾のなかで行われた、むらおこしイベントにおける村民ボランティアの3年間にわたる活動を事例として取り上げ、地域イメージ形成という外的な過程と、人々の「生」と「経験」の内的な過程が、相互に参照され影響を及ぼしあいながらも決して調停されることのないそのありようを描いている。堀野²¹⁾が指摘するように、表象が記号化されるなか、観光まちづくりにおける独自

の地域像を表象することは決して容易ではないが、吉野郡の事例では外部からのアプローチにより、イベントを通して映画『萌の朱雀』²²⁾やその舞台となった五新鉄道²³⁾を中心とするイメージが成立された事例ともいえる。しかし、『萌の朱雀』で描かれる「西吉野村」の人を演じつづけることも、また開通したことのない五新鉄道を活用しながら、地域外部主体で続けられるイベントも、地域内部には受け入れにくい部分があったと思われる。外部から求められるイメージに十分に对应できない場合、観光という側面から考えると成功には結びつかない可能性がある。吉田²⁴⁾のいう地域社会の観光へのかかわり方のうち、スモール・ツーリズムを含む観光へのかかわりを選択した地域においては、外部から求められる地域像に如何に応えるかという点は重要な課題となる。

地域表象においては、地域外部との関係性のみならず、地域内部での調整に関する課題も指摘されている。韓国のドンピラン地域を対象に住民参加の観光まちづくりの利点と課題を考察した白ら²⁵⁾は、観光まちづくり活動への参加が観光業従事者に偏り、有志たちの経済的側面への集中が魅力的な生活空間の形成を妨げた結果、有志を含む実践主体と一般住民との間に排他的な距離感を生んでいることを指摘している。また、地域社会の将来イメージが地域全体に共有されないことも観光まちづくりの課題として言及されている。

上記の内容から観光まちづくりを担う地域住民の主体性とその限界を垣間見ることができたが、次章では針江集落における観光まちづくりを概観する。

Ⅲ. 針江集落における観光まちづくりの実践

1. 滋賀県高島市新旭町針江集落の概要

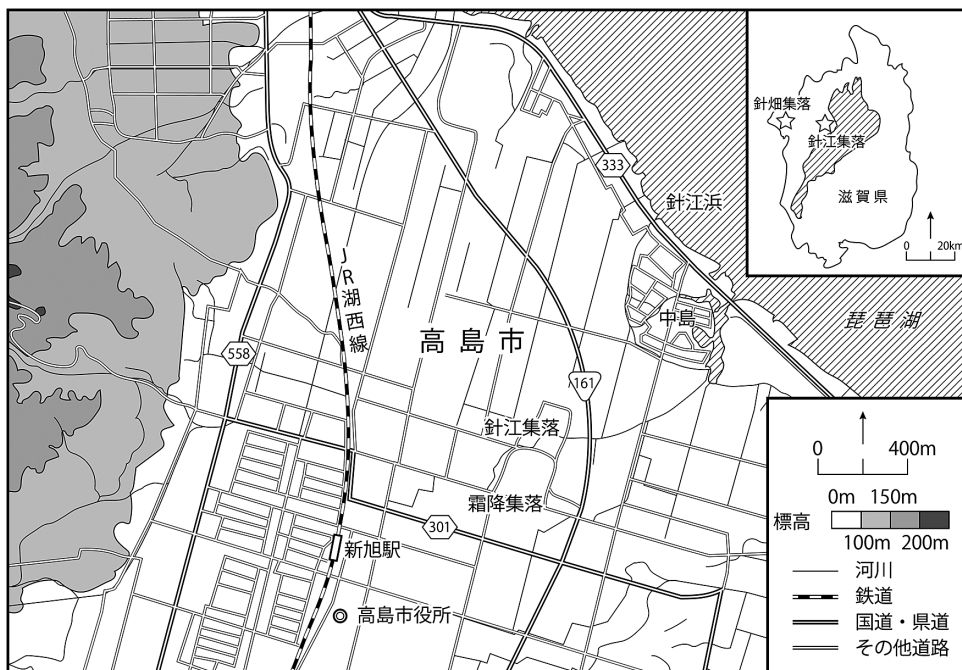
比良山系の東側、琵琶湖の西側に位置している高島市新旭町針江（第1図）は、総戸数170戸、面積60haからなる農村集落である²⁶⁾。比良山系の地下水と安曇川の伏流水が流れ、湧水が豊富で昔から繊維産業が発達した同集落には、川端^{かばた}と呼ばれている、湧水を飲料・炊事等の生活水として使用する伝統的水利用システムがある。川端は、元池（湧水の出処）、壺池（飲料・洗顔等で利用される箇所）、端池（水路及び川と繋がる箇所）で構成され、端池で飼われている鯉が洗いものの後に残る米粒や野菜等を処理してくれる。針江集落に張り巡らされている水路と川端の端池が繋がっていることから、川端から

水路に出る水は汚さないという、暗黙のルールが培われてきた。同集落では、簡易水道が普及した今でも湧水が飲料・炊事などのために使い続けられている。

2. 生水の郷委員会の設立と実践

(1) 設立と案内の実践

針江集落を舞台にしたNHKドキュメンタリー『里山Ⅱ：命めぐる水辺』が2004年1月9日NHKBSハイビジョンスペシャルと同年4月4日地上波NHKスペシャル短縮版で2回放映されたことで、同集落の川端や生活文化への関心が一気に高まり、来訪者が急増した。車で来訪する人が多く、狭い道が混雑する一方、来訪者の中には、勝手に敷地内に入り川端を見ようとする人もいた。加えて、外部から訪れた人が針江集落の子供に声をかける場面が目撃され、地域住民にとって自らの生活と子供を守ることが緊急の課題となっ



第1図 地域概観図

た。地域の有志と行政担当者が集まり会議が行われ、行政側から来訪者をコントロールしながら、地域発展にも貢献できる見学システムの導入を提案された。自治会の針江区は来訪者の対応を見送ったため、案内を担う組織として地域の有志により生水の郷委員会が設立された。その中心となったのは50歳から65歳の住民で構成される壮友会と65歳以上の住民で構成される老人会のメンバーで²⁷⁾、初代会長を務めたのも当時の壮友会の会長であった²⁸⁾。

2004年5月22日に初めてのツアーが半日コースで行われ、後にAコース（川端と街並み）、Bコース（里山湖畔）、Cコース（川端と街並み・里山湖畔）に見学コースが分けられた。来訪者は、見学費用（一人当たり、Aコース・Bコース：1千円、Cコース：2千円）を支払い、生水の郷委員会のメンバーの案内を受ける。毎月の第2・4の土曜日に約2時間半から3時間をかけて針江浜から集落を回る定期ツアーも実施されたが、バス料金の値上げや、人手不足等の理由で2011年に中止された。それでも生水の郷委員会の案内を受ける人数は、800人（2004年）から、9,196人（2011年）に急増した²⁹⁾。生水の郷委員会のメンバーも設立当時26名だったが、2009年には74名に増加した³⁰⁾。

（2）川端から環境へと広がる意識と実践

生水の郷委員会のメンバーは、外部からの川端をはじめとする針江集落の自然環境との関係に対する関心に驚かされたと語る。彼らは、来訪者を案内することで直接外部からの評価を聞き、川端を含む自らの生活環境を見直し、環境保全活動にも積極的に取り組むようになる。例えば、竹林保全活動、花壇整備、中島³¹⁾整備、うおじまプロジェクト³²⁾、魚

のゆりかご水田³³⁾、みずすまし水田³⁴⁾、自然観察会の支援、廃油で作った「おかえり石鹸」の普及への取り組み、環境関連フォーラムの開催、水路に鯉を入れる等がそれにあたる。

同時に彼らは、自然環境とその保全について学ぶため、毎年自発的に研修を行っている。2008年から2011年にかけて、エコツアー先進地「海島遊民くらぶ」研修、琵琶湖研修、生水の原点を辿る針畑集落研修、エコツアー先進地「飛騨高山」研修を実施した。「生水の源流を訪ねる『朽木・針畑郷との交流と源流見学研修』」（2010）では、上流の山林が荒れていては、きれいな水が針江集落に湧き出ず、琵琶湖にも影響を及ぼす恐れがあることから、針畑集落の人々と一緒に森林保全・管理の計画を立てている。研修以外の場でも学習の場面は見られ、生水の郷委員会の総会の後、積水化学グループの『自然に学ぶものづくり』をメンバー全員で視聴している³⁵⁾。

（3）針江集落に対する評価

針江集落に対する外部の評価は、生水の郷委員会の設立後、年々高まってきた（第1表）。とりわけ、2010年8月には、高島市針江・霜降の水辺景観が8つの選定基準の内「ため池・水路・港などの水の利用に関する景観地」、「板根・屋敷林などの居住に関する景観地」として評価され、文化庁より重要文化的景観に選定されたことや、環境省と日本エコツーリズム協会共催のエコツーリズム大賞の特別賞、優秀賞、大賞を受賞していることは特筆すべきであろう。

針江集落は『里山Ⅱ：命めぐる水辺』の作品を通じて、海外からも注目される。2005年12月には、韓国の公営放送社（KBS）が取材に訪れ、以降ほぼ毎年取材を続けている。2007年11月には、韓国の民営放送社（MBC）

第1表 針江集落関連の主な受賞歴

年	受賞内容
2005	針江区が「美の里づくりコンクール」の審査会特別賞受賞（農林水産省）
2006	針江げんき米グループが「豊かなむらづくり」農林水産大臣賞受賞（農林水産省）
2007	生水の郷委員会がエコツーリズム大賞の特別賞受賞（環境省と日本エコツーリズム協会）、安倍首相の視察訪問
2008	針江の生水が平成名水百選に選定（環境省）
2010	高島市針江・霜降の水辺景観が重要文化的景観に選定（文化庁）、建築甲子園で川端のある住まい提案で滋賀県安曇川高校が全国優勝（日本建築士会連合会等）
2012	生水の郷委員会がエコツーリズム大賞の優秀賞受賞（環境省と日本エコツーリズム協会）
2014	生水の郷委員会がエコツーリズム大賞の大賞受賞（環境省と日本エコツーリズム協会）
2015	高島市針江・霜降の水辺景観を含む滋賀県の水辺景観が日本遺産「琵琶湖とその水辺景観―祈りと暮らしの水遺産」に選定（文化庁）

が同作品を紹介し、2009年12月にも再放映している。台湾でも同作品が放映され、個人旅行で針江を訪れる人もいる。2007年4月17日にはオーストラリアから23人が、「究極の日本体験ツアー」と銘打った旅行プランで来訪し、同年の7月28日には韓国の子ども交流体験で60名が訪れた。生水の郷委員会が編集・発行を行っている『かばた通信』³⁶⁾第7号には、2010年、国土交通省の協力のもと、「水と環境」というテーマで中国国営テレビの撮影が実施されたことや、21世紀東アジア青少年交流事業として外務省より招待されたタイの高校生24人が川端を見学し、針江大川の藻刈りも体験したことが記載されている。

生水の郷委員会のメンバーは、「里山」としての地域の表象を外部から押し付けられるものとしてではなく、自然環境や生活世界を客観的に見る視座を得ることで、針江の特殊性を理解し、理想的な農山村の表象を自らも行っている。生水の郷委員会のメンバーは、京都新聞のエコな挑戦報告会（2006年、米原市）、第14回目の世界湖沼フォーラム（2011年、アメリカ・オースチン）、第15回湖沼フォーラム（2012年、イタリア・ペルージャ）

等で、彼らの生活環境と活動内容を報告している。

IV. 地域内部における葛藤と外部からの期待の狭間で続けられる 観光まちづくり実践

本章では、地域内部で見られる葛藤とその緩和に取り組む一方、地域外部から求められる理想的な農山村「里山」として地域像を意識しながら続けられる生水の郷委員会の実践の詳細を記述した上で、観光まちづくりにおける地域住民の主体性について考察する。

1. 地域内部に見られる葛藤とその緩和に向けた生水の郷委員会の取り組み

生水の郷委員会は、自治会とは独立した形で有志によって設立されたが、設立2年目から自治会針江区の下位団体として位置づけられた³⁷⁾。生水の郷委員会のメンバーによると、自治会に「入れてもらっている」という。外部の窓口としての性格が強い生水の郷委員会と自治会の代表ともいえる針江区役員の関係性は、上手に付き合ってきている部分もあるが、難しい側面があることも事実だという。それを象徴するような言葉が「本家より大き

くなった会」という表現だが、資金力のみならず、ある生水の郷委員会のメンバーは「雰囲気も針江区の方が負けている」と語る。生水の郷委員会の活動履歴³⁸⁾からは、2006年5月に「この時から区も少しづつ協力しとけ合う」と書かれ、緊張が緩和されたことがうかがえる。ただ、2008年1月の活動履歴には「針江区役員と委員会との話し合い」、「委員会の活動に理解を得た」という記述があり、自治会の下位組織になってから3年以上の時間が経ってようやく生水の郷委員会と区役員との関係性に改善が見られたことが確認できる。

生水の郷委員会は、区の役員との関係のみならず、地域住民との関係において生じるコンフリクトに関する議論も行ってきた。地域内には、生水の郷委員会の案内を経済的な利益を追求するための活動であるという認識や、生水の郷委員会のメンバーに対し名誉欲があるように見えるという意見もある³⁹⁾。2006年10月には、区民のなか、「理解を示す人とそうでない人との温度差がまだあるので、情報を区民にこまめに流す努力をする」⁴⁰⁾と活動履歴に記載されている。生水の郷委員会は、上記の自治会の役員との関係性や地域住民との関係性の改善を図るために様々な取り組みを行っている。例えば、生水の郷委員会は、『かばた通信』という針江区民に生水の郷委員会の活動や針江、川端に対する外部の評価や意見などをまとめた内容のものを発信している。第7号に載せられた当時の針江生水の郷委員会の会長を務めていたY氏の文からは、自治会の役員や針江区の住民に気配りをしながら、生水の郷委員会の活動への理解を求めている様子が伺える。とりわけ、重要文化的景観に関しては、「区の役

員方々の手により」という記述、さらに、「針江を守る」ための活動という位置づけを明確に示している⁴¹⁾。

また、生水の郷委員会が針江集落の至るところに掲示している貼り紙には、「観光地ではありません」、「生活の場です」という記述が見られる。生水の郷委員会は、「観光」の代わりに、「勉強」や「学習」の文脈で来訪者を受け入れており、「大衆観光（地）」をタブー視する姿勢を見せている。実際、生水の郷委員会は観光化しない住民の素朴な案内が大事であると考え、案内役のための制服は作らないことも決めている⁴²⁾。さらに、2006年より始めた宿泊施設の運営においても、同年5月に名づけ設置した「生水の宿」という看板が旅館業と誤解されやすいことから、「生水の生活体験処」に変更した⁴³⁾。それらの取り組みは、地域住民に生水の郷委員会の活動を理解してもらえるための、「事業の論理」ではなく「管理の論理」に基づく実践とその強調とも捉えられよう。

2. 外部から期待される理想的な農山村「里山」としての針江

針江集落における観光まちづくりにおいて考察すべきもう一つ重要な点は、針江に求められるものは何か、またそれを生水の郷委員会が如何に認識しているという点である。生水の郷委員会は、見学者が何を評価するかに関して、案内を開始した時期に行ったアンケート調査を通して把握している。アンケートの内容をみると、観光地化しないで頑張ってもらいたいという言葉や自然と共存する姿がすばらしいというコメントが見られる一方、地域のコミュニティや人間関係に関する言葉も目立つ。

- ・ 水がキレイ！！たくさんの家で水を使いわけていて、町のコミュニティが良いなあと思いました。(21 歳・女性)
 - ・ 区民の方々が針江の水を皆で守っておられる事がすごいです。何が、どうしてこうした結果が出来たのか考えてみたい。(51 歳・男性)
 - ・ 地域一帯で取り組んでおられることがあるためか、感心したのは年配の方若い方の垣根を越え、地域住民の仲がとてもいいということです。理想の社会のような気がしました。(29 歳・男性)
 - ・ たまたま居合わせた地元の女の子といっしょに川を下って楽しそうでした。体験所のお隣の方のお子さんたちとも遊ばせていただいて、～(中略)～地元の皆さんの力のおかげで私たちのような部外者も「川端のある生活」の一端を見ることができ、とても感謝しています。(年齢・性別不明)
- (出典：NPO 法人 En (えん) 編集⁴⁴⁾、生水の郷委員会のホームページ⁴⁵⁾)

川端という自然と共存するシステムを守ってきた針江集落の人々、その人間関係に対する高い評価が確認できる。短い時間ではあるが、来訪者の子供が針江の子供と一緒に川遊びをする場面や、針江住民の優しさに触れる場面で覚える感動が、地域外部の人々にとっては、川端という生活文化以上に重要視されているようにも見える。2006 年 10 月の活動履歴には、「来客からは風景、水だけでなく住民の人情が称賛されている」、「このことを区民一人一人が理解することが針江の活力を増すことになる」という記載が見られ⁴⁶⁾、生水の郷委員会が、外部からの評価を十分に認識、また意識していることが確認できる。

さらに「区民の活力が存続する限り、マスコミの注目は続き、海外も含めた来客は増えていくだろう」と予測している⁴⁷⁾。

生水の郷委員会は、教育研究機関、研究者・学生から期待される地域像に関しても十分認識している。2006 年 8 月の活動履歴には、福岡県のある中学校の修学旅行先として針江集落が選ばれたところを受け、『里山』に表現される教育的価値があると学校が認知した初めてのケース」、「今後も修学旅行先に指定される可能性は十分にあり、本格的なエコツーリズムが始まる兆しとも思われる。確かな指針と対応策が必要となる」という記述が見られ⁴⁸⁾、同年 11 月には「大学、県知事、市長、後押ししていただき、やりがいがあるが責任も多い」、「いい加減な事はできない」、「環境省、水資源公団、国、県、市町村や学校の修学旅行や勉強・学習の場に広がっていく」と書かれている⁴⁹⁾。さらに、2006 年 2 月に行われた生水の郷委員会の目標や実践に関する議論に、「区のため」に行う活動であることとともに、「針江のイメージ(今森光彦⁵⁰⁾の世界)が一番大事であり、訪れた人が納得のいく料金体系であるかどうか常に考えることが必要」という議論内容も確認できる⁵¹⁾。

以上を踏まえると、彼らは地域内部の自治会の役員や地域住民との関係性のみならず、外部が求める理想的な人間関係を有する農山村「里山」像を十分に理解した上で活動を続けてきたことが分かる。

3. 生水の郷委員会の外部主体との距離感と柔軟な実践

生水の郷委員会は、多様な外部の主体との関係性を構築しながら活動を続けている。とりわけ、前滋賀県知事の嘉田由紀子氏と『里山Ⅱ：命めぐる水辺』のプロデューサーの今

森光彦氏は針江集落の里山像に影響を及ぼした主な人物であるが、生水の郷委員会が受動的に彼らの意見を受け入れているわけではない。例えば、生水の郷委員会は、今森氏の「里山塾」を区の行事と重なることを理由に針江での開催を断った。また、嘉田前滋賀県知事が高校生の第1回建築甲子園で優勝した川端のある家を針江集落に建てたらどうかと生水の郷委員会の当時の会長に勧めた際には、「ハコモノ」を造らないという生水の郷委員会の方針に基づき、回答を先送りし、提案を拒否したことがある。さらに、彼らは卒業研究やゼミ研修で地域を訪れる大学生との関係性については、「大学生によるカバタ調査には、我々の調べたいことを反映させ有効活用する」⁵²⁾ことを議論している。なお、外部の研究者の協力を得て、地域の案内・説明文の多言語化も進めている。生水の郷委員会は、多様な外部の主体と協力しながら、また時には距離を置きながら、柔軟な実践を続けている。

V. おわりに

実践的手法への探求と批判的考察に大別される観光まちづくり研究においては、地域外から求められるイメージと地域内のコンフリクトの両方を意識しながら行われる観光まちづくりの実践を捉える分析視角の不在が課題として浮き彫りになっている。本稿では『里山Ⅱ:命めぐる水辺』というドキュメンタリー作品を主な契機として日本国内外から「里山」、「究極の日本」として注目されている滋賀県高島市新旭町針江集落の生水の郷委員会に焦点を当て、観光まちづくりにおける地域住民の主体性を中心に考察を行った。スモー

ル・ツーリズムという形でも観光とかかわりながら、まちづくりを行う主体にとっては、地域外部から求められる地域像を意識し、同時に地域内部に生じるコンフリクトの緩和にも向き合う必要がある。本稿で取り上げた生水の郷委員会は、外部から与えられた「里山」イメージに応える形で、地域の有志によって設立され、来訪者の案内を通じて川端を含む生活文化を見直し、研修等で自然環境やその保全について学びながら、地域の環境保全活動にも積極的に取り組んでいる。自治会の代表ともいえる針江区の役員や生水の郷委員会の活動に理解を示さない地域住民との間で生じる軋轢や葛藤によって、生水の郷委員会は「大衆観光」や「事業の論理」をタブー視する姿勢を明確にし、地域への貢献を強く意識するようになる。しかし同時に、彼らは地域外部から生活文化のみならず、理想的な人間関係が評価されていることも活動初期に行った見学者を対象にしたアンケート調査を通して十分に認識している。彼らが行っている「管理の論理」に基づく実践を地域内部のコンフリクトを意識した結果として捉えるのは必ずしも十分な分析とはいえず、その実践が地域外部から求められる理想的な農山村「里山」にも符合することを看過してはならない。

他方で、生水の郷委員会は、「里山」表象において重要な役割を担ったNHK番組プロデューサーの今森光彦氏や前滋賀県知事の嘉田由紀子氏とのつながりを重要視しながらも、地域のために行う活動を中心に据え、彼らとの一定の距離感を保とうとする場面も見られる。また、演習活動や卒業研究のために針江地区を訪れる大学生に対しても、生水の郷委員会は自分たちが調べたいテーマやトピックを調査してもらえるようにすることを

議論する一方、針江集落の調査を行う研究者たちによる地域紹介や生水の郷委員会の活動内容の多言語化も進んでおり、外部の主体との関係性を上手に活用する姿勢も見受けられる。

針江集落の生水の郷委員会は、エコツーリズム大賞の「特別賞」、「優秀賞」、「大賞」を受賞する一方、針江集落の水辺景観は、重要な文化的景観や日本遺産に選定されている。国内外の教育研究機関やメディア、そして旅行業界からも、日本を代表する理想的な生活文化を有する「里山」としてのみならず、観光まちづくりの成功事例としても非常に高い評価を受けている。今後、生水の郷委員会が如何に外部の期待に応えながら、同時に内部のコンフリクトと向き合うかに関しては、更なる考察が必要となる。生水の郷委員会は、これまで試行錯誤を経ながら、「里山」の表象に加え、地域内外の多様な主体との付き合い方や意見調整のノウハウを蓄積している。その点が今後の彼らの活動にどのように影響するかを分析することで、観光まちづくりを担う住民及び組織の主体性に関する新たな示唆が得られると考える。

〔付記〕本稿は、筆者が2012年に立教大学大学院に提出した博士学位論文『観光まちづくり現場の民族誌的考察の試み—大分県由布院と滋賀県針江の事例を通して—』の一部を加筆・修正したものである。本稿で用いるフィールド・データは、主に2010年1月から2017年7月までに行った現地調査・電話での事実確認に基づいている。なお、地域概観図の作図においては、板垣武尊氏（立教大学）の協力を得た。記して御礼申し上げたい。

注

- 1) 北原 淳 (1996)『共同体の思想—村落開発理論の比較社会学—』、世界思想社。

- 2) 古川 彰・松田素二編 (2003)『観光と環境の社会学』、新曜社。
- 3) 安村克己 (2006)『観光まちづくりの力学—観光と地域の社会学的研究—』、学問社。
- 4) ①西村幸夫編 (2009)『観光まちづくり—まち自慢からはじまる地域マネジメント—』、学芸出版社。②敷田麻実・内田純一・森重昌之編 (2009)『観光の地域ブランディング—交流によるまちづくりのしくみ—』、学芸出版社。③十代田朗編 (2010)『観光まちづくりのマーケティング』、学芸出版社。④総合観光学会編 (2010)『観光まちづくりと地域資源活用』、同文館出版。
- ⑤大社 充 (2013)『地域プラットフォームによる観光まちづくり—マーケティングの導入と推進体制のマネジメント—』、学芸出版社。
- 5) 前掲4) ②。
- 6) 前掲4) ③。
- 7) 前掲4) ⑤。
- 8) 香取幸一 (2011)「小泉内閣の観光政策に関する一考察」、論叢：玉川大学経営学部、16、47-66。
- 9) 堀野正人 (2004)「地域と観光のまなざし—「まちづくり観光」論に欠ける視点—」、遠藤英樹・堀野正人編『「観光のまなざし」の転回—越境する観光学—』、春風社、113-129。
- 10) 四本幸夫 (2014)「観光まちづくり研究に対する権力概念を中心とした社会学的批判」、観光学評論、2(1)、67-82。
- 11) ①須藤 廣 (2006)「『観光化』に対する湯布院住民の解釈フレーム分析」、北九州産業社会研究所紀要、47、63-72。②今村都南雄・金井利之・鳴田暁文・光本伸江 (2006)「大分県湯布院のまちづくり、その後—湯布院町役場編—」、自治総研、32(4)、1-23。③今村都南雄・金井利之・鳴田暁文・光本伸江 (2006)「大分県湯布院のまちづくり、その後—由布院観光旅編—」、自治総研、32(5)、1-23。④野田岳仁 (2013)「観光まちづくりのもたらす地域葛藤—「観光地ではない」と主張する滋賀県高島市針江集落の実践から—」、村落社会研究ジャーナル、20(1)、11-22。⑤野田岳仁 (2014)「コミュニティビジネスにおける非経済的活動の意味—滋賀県高島市針江集落における水資源を利用した観光実践から—」、環境社会学研究、20、117-132。
- 12) 前掲11) ④。
- 13) 前掲11) ⑤。
- 14) 韓 準祐 (2016)「由布院の事例分析を通じた観光まちづくり研究の再考察の試み」、観光学評論、4(2)、91-106。
- 15) 森重昌之 (2015)「定義から見た観光まちづくり研究の現状と課題」、阪南論集 人文・自然科学編、50(2)、21-37。

- 16) 前掲 2)。
- 17) 井戸 聡 (2003)「リゾート期における村の選択—琵琶湖湖西の事例から—」、古川 彰・松田素二編『観光と環境の社会学』、新曜社、134-159。
- 18) 松田素二 (1984)「浜の開発—村主導の開発をめぐる二つの論理—」、鳥越皓之・嘉田由紀子編『水と人の環境史』、御茶の水書房、125-161。
- 19) 寺岡伸悟 (2003)「地域表象における二つの過程—村おこしイベントから—」、寺岡伸悟『地域表象過程と人間—地域社会の現在と新しい視座—』、行路社、148-185。
- 20) 自治体が企業のコーポレート・アイデンティティを応用し、コミュニティ・アイデンティティを構築する試み。
- 21) 前掲 9)。
- 22) 奈良県出身の映画監督河瀬直美氏が五新鉄道を素材に撮った映画。同作品は、1997 年カンヌ国際映画祭に出品され、日本映画として初めて河瀬氏が新人監督賞を受賞した。河瀬監督に対するメディアの注目とともに、映画も各地で上映され、映画ファンが西吉野村に訪れるようになった。
- 23) 大正期、現在の奈良県五條市と和歌山県新宮市を結ぶために計画されたが、工事開始当初から政治的なレベルで建設継続の判断が揺れ続け建設中止となった、紀伊半島縦断の路線。
- 24) 吉田春生 (2006)『観光と地域社会』、ミネルヴァ書房。
- 25) 白 りな・十代田朗・津々見崇 (2016)「住民と観光客の意識からみる住民参加による観光まちづくりの利点と課題—ドンピラン地域を事例として—」、観光研究、51(1)、13-22。
- 26) 2009 年時点、『平成 21 年度針江区民台帳』、高島市新旭地域のヨシ群落および針江大川流域の文化的景観保存活用委員会 (2010)『「高島市針江・霜降の水辺景観」保存活用事業報告書』、高島市、2 頁。
- 27) 前掲 11) ⑤、120 頁。
- 28) 前掲 11) ④、15 頁。
- 29) 前掲 11) ⑤、122 頁。
- 30) 各戸に一人という形のみならず、夫婦で参加するケースも見られる。
- 31) 針江大川と小池川と琵琶湖の間に位置する内湖。
- 32) 「うおじま」とは、湖岸に産卵にやってくる大群の魚の様子が、島のように見えたことから名付けられたと言われている。「うおじまプロジェクト」は、「うおじま」を復活させることで、失われた琵琶湖の環境をとりもどす取り組みとして、高島市からスタートした。
- 33) 湖魚が産卵・成育できる水田環境を取り戻そう！というキャッチフレーズのもと、農家、地域、琵琶湖、そして生きものにとって大切な「魚のゆりかご水田」人や生きものが安心して暮らせる田んぼの環境を取り戻すプロジェクト。
- 34) 週末に集中的に農作業を行うサラリーマンが増えたため、使われた水を一回澄まして琵琶湖に流そうとする試み。
- 35) 針江生水の郷役員会議事録 (2011 年 1 月 30 日)。
- 36) 針江生水の郷委員会編集発行 (2010)『かばた通信』、第 7 号、2010 年 6 月 19 日。
- 37) 自治会針江区は、民生児童委員や福祉推進委員、げんき米栽培グループ、集落営農組合、小学校・中学校 PTA、老人会、子ども会、壮友会等によって構成されている。
- 38) 針江生水の郷委員会 (2009)『生水の郷委員会活動履歴』、4-8 頁。
- 39) 前掲 11) ⑤、127 頁。
- 40) 針江生水の郷委員会 (2009)『生水の郷委員会活動履歴』、6 頁。
- 41) 前掲 36)。
- 42) 針江生水の郷委員会 (2009)『生水の郷委員会活動履歴』、4 頁。
- 43) 前掲 40)。
- 44) NPO 法人 En (えん) 編集 (2007-2009)『みずが湧き出すまち針江』、針江生水の郷委員会。
- 45) 針江生水の郷委員会のホームページ (旧) <http://www.geocities.jp/syouzu2007/indexfureime.html> 2012 年 10 月 1 日閲覧。
- 46) 前掲 40)。
- 47) 前掲 40)。
- 48) 針江生水の郷委員会 (2009)『生水の郷委員会活動履歴』、5 頁。
- 49) 前掲 40)、嘉田前滋賀県知事は、1970 年代後半から琵琶湖周辺地域の調査を行い、生活環境主義を提唱した研究者である。1990 年代には「水と文化研究会」代表を務め、2000 年代に入ってから「世界水フォーラム」の「世界子ども水フォーラム」を企画した。
- 50) 『里山Ⅱ：命めぐる水辺』のプロデューサー。
- 51) 前掲 42)。
- 52) 前掲 48)。